柏原小学校　道徳通信

ほっと ハート

令和３年３月１２日

第２２号

柏原小学校　道徳部

ほっとコラム

優しいきもち

○○　○○

「家族や友達が困っていた時、声を掛けたり助けたりしますか？」ほとんどの人が何かしら行動を取るでしょう。では、「知らない人が困っていた時、声を掛けたり助けたりしますか？」私は、見て見ぬ振りをしてしまう人でした。しかし、2011 年３月 11 日、「知らない人たち」に出会い、大きく考えが変わったのです。

2011 年３月 11 日、中学生だった私は、乗り換えをするために電車を待っていました。私の家は学校から電車で 1 時間近くかかるところにあります。そんないつもと変わらない日常が、14 時 46 分を機に大きく変わりました。東日本大震災です。

ホームの天井の電気が落ちてきて、隣にいたお母さんが泣き出す子供を抱きしめ守っていました。悲鳴や鳴き声が聞こえてきます。私は、一人驚きと恐怖で立ちすくんでしまいました。想像していたよりも、とてもとても大きな地震でした。

私はひとりぼっちで、家族の迎えをひたすら待ちました。携帯の電池が切れていたので、連絡手段は長蛇の列になっている公衆電話に並ぶしかありません。不安で不安で泣きたい気持ちを必死に抑えて夜の９時まで待っていましたが、最終的に学校まで２時間かけながら歩いて戻り、学校に泊まることになりました。心が押し潰れそうな不安の約８時間の間、私の支えになっていたのが「知らない人たちの優しい言葉」でした。「一人なの？寒くないかい？」ホームで待っていた時に声を掛けてくれたおばさん。「なかなか電話できませんね～」公衆電話に並んでいた時にぼそっと呟いたおじさん。「ここをずっと真っ直ぐ行けば大丈夫よ！」優しく教えてくれたたくさんの人たち。この知らない人たちに、中学生の頃の私はどれだけ助けられたでしょう。もう会うことのない名前も知らない人たちですが、たった一言で心が温かくなる、「人の優しさ」に触れた出来事でした。

「お年寄りが重たい荷物を持って階段を降りようとしていた時」「妊婦さんが電車の椅子に座ることができずにいた時」「道に迷っている人を見かけた時」「具合が悪そうな人を見かけた時」…そんな時にそっと声を掛けて助けてあげる、あの大地震の時に会った「知らない人たち」のような優しい人でありたいと思っています。

ほっとコラム

やらまいか！

○○　○○

道徳コラムを書くことが決まったときに、みなさんに紹介したいことがあるから、この内容で書こうと思いました。

「やらまいか」この言葉を聞いたことがある人はいるでしょうか。私は柏原小に勤務する前、静岡県浜松市の小学校に勤務していました。「やらまいか」は私の生まれ育った静岡県浜松市（遠州地方）の方言です。浜松でよく言われてる「やらまいか」。これは、単なる方言ではありません。「やってみよう」「やってやろうじゃないか」を意味し、「あれこれ考え悩むより、まず行動しよう」という新しいことに果敢にチャレンジする精神を表しています。

そんな「やらまいか」精神が色濃く表れているのが、今からおよそ４５０余年前に始まった「浜松まつり」です。当時の浜松を治めていた城主の長男誕生を祝って凧を揚げたことが起源であると言われています。神社仏閣の祭礼とは関係ない、自分たちの手で生まれた〝市民のまつり〟が「浜松まつり」です。「遠州のからっ風」と呼ばれる強い風が吹く浜松は、気候的にも凧揚げに好条件であり、子供の誕生を祝う「初凧」の伝統が現在まで根付いています。戦争があり、一時浜松まつりが開催できないこともありましたが、終戦わずか３年後に復活。５月３日、４日、５日の３日間は、浜松の空に大きな凧が舞い上がります。巧みな糸さばきで初凧が揚がり、悠々と大空を舞う姿や各町が互いの凧糸を絡ませ、擦り合いながら相手の糸を断ち切る糸切り合戦もあり、その光景は圧巻です。大空に浜松っ子の心意気がぶつかり、地域の絆が結ばれる大切な３日間となります。現在では１７０を超える町が参加し、夜に御殿屋台の引き回しや、法被姿の一団が「オイショ、ヤイショ」の掛け声とともに激練りを展開。浜松まつりのために、私を含め、全国に散らばっている浜松っ子が地元に戻ってきます。子供からお年寄りまで、また男女を問わず参加できる市民あげてのお祭りとして、浜松まつりは今でも成長し続けています。

生まれ育った浜松を離れるときに寂しい気持ちもありましたが、私は「やらまいか」精神で新しい地でも頑張ろう、浜松のよいところを発信しようと決めました。柏原小の子供たちも、大きくなって地元を離れたときに、郷土を愛したり、伝統を守ったりする気持ちを持ってほしいと思います。私は、そんな子供たちが育つことを願っています。